

森有正著「生きることと考えること」講談社現代新書 1970年11月16日刊を読む

経験と体験

1. (1) 体験と経験ということばの使い分けは、私自身、非常に人工的に見えてくることもあるほどです。これは非常に困難な問題ですが、大筋は、私の中に一応つぎのように成立していると思うのです。
 - (2) 人間はだれも「経験」をはなれては存在しない。人間はすべて、「経験を持っている」わけですが、ある人にとって、その経験の中にある一部分が、特に貴重なものとして固定し、その後の、その人のすべての行動を支配するようになってくる。すなわち経験の中のあるものが過去のなものになったままで、現在に働きかけてくる。そのようなとき、私は体験というのです。
 - (3) それに対して経験の内容が、絶えず新しいものによってこわされて、新しいものとして成立し直していくのが経験です。経験ということは、根本的に、未来へ向かって人間の存在が動いていく。一方、体験ということは、経験が、過去のある一つの特定の時点に凝固したようになってしまうことです。
 - (4) だから、どんなに深い経験でも、そこに凝固しますと、これはもう体験になってしまうのです。これは一種の経験の過去化というふうに呼ぶことができます。過去化してしまえば、経験は、未来へ向かって開かれているという意味がなくなってしまうと思うのです。
2. (1) この経験と体験、あるいは変化と変貌との対立は、人間と自然との間にも出ています。つまり、日本ではこういうことがいえると思うのです。
 - (2) この間偶然にI・C・U(国際基督教大学)から三鷹の駅へ来るバスに乗りました。すると、そことなりの神学大学の学生が一人乗ってきて、「隣の神学大学のものです」というあいさつをして、名前はいいませんでしたが、「先生のご本の中に、“日本には裸の自然がない”とありましたが、あれはどういう意味ですか」ときくわけです。「現に、ここにある自然はみんな裸じゃないですか。山もあるし、川もあるし。」

(3) 私は、こう説明しました。

日本にある自然は、もう全部、性格と役割——内的性質がきまっている。富士山・江ノ島・三保の松原・九十九里浜、あるいは日本アルプスの槍ヶ岳・白馬・乗鞍・常念、それから、どこどこ何々という山、何々という川、何々の滝——つまり日本の自然というのは、全部が名所の集まりです。全部が名所。だからみんな名所を見に行くのであって、自然なんか見に行きはしないのです。

二見ヶ浦に太陽が出るところが絵にかかれています。みんなが二見ヶ浦の日の出を見に行くのは、そこでその絵を見ようと思って行くのです。また富士山だったら、だれでも、大昔、赤人が「富士の高嶺に雪は降りつつ」と歌ったとき以来の富士山です。日本人はみんな知りぬいている。赤人が歌ったような、あるいは北斎が描いたような形をした山として、日本人みんなの中にはいる。一万二千尺の高さの未知の自然としてあるわけではない。瀬戸内海——これも全部が名所です。

このように、自然が全部名所だということは、日本の自然は全部体験の対象になっていて、経験の対象になっていないということです。経験の対象はいつも無記名です。これは重要なことです。固有名詞をもったものでも、経験の中では、無記名の要素に分解されてしまう。

(4) ところが、フランスに行ってごらん下さい。あそこには、そんな名所など一カ所もない。モンサンミシュルが名所だというなら、それはその建物が名所なのです。そこには、長い大きな土地がつき出た海岸があります。ぼうばくとした海岸です。そんなものは名所ではない。自然のままです。

アルプスでも、南のほうの果てしない丘陵地帯でも、ことに東フランスの原野など、ものすごいものです。自然がことごとく裸のまま露出している。

私がそういうと、その学生はやっと、「少しわかったようです」といいましたが、大事なことは、そういう自然に対しても、経験によって絶えず新しいものとして、人間に現われてくるものとしてそれを把えることです。体験として、自然に接するときは、いつでも自然は名所的なものになる。日本人は体験的に自然に接するのですから、ノルマンディーなら、あそこには牧場があって、たくさん牛を飼っているというので、ノルマンディーの牛を見にやってくる。ロンドンへ行ってロンドン塔を見る。パリへ行ったらエッフェル塔を見る。つまり、日本人は、外国も全部体験の対象にしているのです。出かけるまえに、観光案内書や写真などでもって知っているのと同じ姿を現地で見つけ出せば、それで満足して帰ってくる。ところが経験的に対象に接するならば、たとえば、ノートル・ダムのカテドラルとか、あるいはシャルトルのカテドラルを何十回見ても、何百回見ても、そのたびにそれらは新しい姿であられる。回をかさねるごとに、かえって新しくなってきましたね。

それは、絶えることなく自分も変わり、相手も変わると同時に、自分と対象との触れ合いそのものが、それに応じて深化して、しかも前に認識し、経験したものが、全部その

中に蓄積され、それを通して新しい変化を生むからです。だからそれは、一つの変貌です。そうでなければものの深みというものはわからないし、注意力も深まらない。物は絶えず新しい面をあらわしてくれるから、私にとっては、たとえばノートル・ダムは、いつまでたっても名所にはならないのです。

そういうわけで、自然といっても、そう簡単には、日本にも自然があるといえないのです。それはもう、完全に人間の「知覚」(感覚ではなく)によっておおいつくされた自然です。裸の自然なんかどこにも見えない。人間の過去の知覚が全部、日本の自然をピッタリおおっている。私には、そう思われます。

3.(1)ヨーロッパの社会にある秩序というものにたいする感覚というものは、ヨーロッパ人のもつ社会という観念と離すことはできないと思うのです。つまりヨーロッパでは、社会はもちろん個人の集まりではあるが、単なる個人の集合ではなくて、個人を超越している一つの「組織体」です、したがって、社会といたら必ずそこに人間の集団のオーガニゼーションがある。そのオーガニゼーションが、秩序あるいは法ということばで表わされているわけです。ですからその意味で、そういう社会の秩序面においていろいろなことが問題になる。フランスの五月事件はそのことを典型的に示した。それが「教育指導法」という法律として結集して成立した。

(2)それにたいして日本のばあいは、人間が集まれば社会だと思っている。しかし、社会である以上、その人間が一つのオーガニゼーションをつくっていなければいけないはず。しかもその組織体は、法という確乎としたものによって公式に表明されていなければならぬ。日本のばあひ、むしろ社会というより、共同体的なものが多いのではないかと考えられます。

(3)それからもう一つ、精神の秩序という問題があります。この無形のものは、それ自体、ヨーロッパでもなかなかむずかしい問題だし、別にそんなにはっきりしているわけではありません。それに宗教的なもの、哲学的なものとは結びついているし、いろいろと過去の伝統的なものと結びついているけれども、ヨーロッパのほんとうの深い精神性は、やはり、新しい人間の実存という考えの中から出てくるので、過去の宗教的な精神性でも、あるいは人間的、哲学的な精神性でも、人間の実存が根源的に含まれていれば、それが精神性というもののもとになっているのではないかと思います。

(4)その精神性というのは、さっきお話したように、人間が「経験」を越えて、それをオーガナイズする働きの中に現われているわけですから。

(5)たとえばヨーロッパには、隠れた秩序というものがあります。しかし、日本にはそういうものがないし、またそういうものがありうるということを信じるのが、日本人にはな

かなかむずかしい。日本人は非常に実証的な人間だからです。ところが、隠れた秩序などというものは実証できない。信じる以外にはしようがない。ですから最近の日本には、隠れた秩序などないわけです。

ということは、日本では秩序というものが、法律という形で外から強制されるものとしてしか存在しないことになるわけです。

[コメント]

ICU で「人格の基礎」と題する森有正先生の講義をお聴きしてから、先生の本を折に触れて読むようになり、数十年が経った。

「経験」と「体験」の違いをどう自分のものにするかも大きな課題だが、これからの時代には社会のシステムをどう考えるかもより大きな課題であるということも少しずつ判ってきたような気がする。

- 2009 年 1 月 28 日林明夫記 -